

趣旨

鈴木杜幾子

「視覚文化とジェンダー研究」、あるいはもう少し限定して「フェミニズムの美術史」。日本においてこうした新しい視座が開けてきたのは一九九〇年代半ばであっただろうか。以来十数年、日々生産される視覚文化や美術の表象は、消費対象であるというその本質を原因とする保守的な人間観に絡め取られ続けているし、それらについて語る言説がその事実を指摘することも、まったくといってよいほどない。だがそれでもその陰で、たとえ「ジェンダー論」あるいは「フェミニズム」の語をかぶせていなくとも、表象行為の主体、受容の主体のありようを問う地道な試みが、確実に継続されてきている。

展覧会、調査研究、シンポジウム等、さまざまな形で行われているこうした活動の多くは、女性の創り手や女性表象を対象とするだけではなく、「東アジア」ないし「東アジアと日本」をめぐるポスト・コロニアリズム的論点を取りいれていること

が多いように思われる。「ジェンダー論」や「フェミニズム」の視座が、大局的にいえば白人中産階級男性による発信と受容を前提としていた近代的学問への異議から出発していることを思えば、それは当然のことであろう。

他方日本の現状では、西洋の視覚文化研究や美術史学の領域に「ジェンダー論」あるいは「フェミニズム」の観点をとりいれている研究は、個人的・散発的に行われているのみであるとの印象を受ける。特に西洋美術史をテーマとする研究者の多くは、欧米の研究に依拠する場合、そのような視点に立つて著されている論考を排除あるいは無視する傾向さえあるように思われる。

欧米、特に英語圏の近代美術史研究においては、ジェンダー論あるいはフェミニズムの立場からの研究は、いつときの問題提起、異議申し立ての過激さこそ沈静化しているが、その代わり、ある時代、ある地域、ある作家の研究において、そうした視点からの論考は定数として存続しているように思われる。これを言いかえるならば、ジェンダー論あるいはフェミニズムに依拠する美術史研究は、美術史学の重要な構成要素となつているのである。学術研究の場だけではなく、ここ数年のあいだに、現代の女性芸術家たちの活動を歴史化してみせた重要な展覧会 (*Global Feminisms, New Directions in Contemporary Art*, Brooklyn Museum, New York, 2007; *Davis Museum and Cultural Center, Wellesley College, Wellesley, 2007 / Wack! Art*

and the Feminist Revolution, The Museum of Contemporary Art, Los Angeles, 2007; National Museum of Women in the Arts, Washington, 2007; PS.1 Contemporary Art Center, Long Island City, 2008; Vancouver Art Gallery, Vancouver, 2008) やメジャーな美術館において女性芸術家だけの常設展示 (*elles@centrepompidou*, 2009-2010、担当学芸員 Camille Morineau) による序文の抽訳、カミュー・モリノー「『ポンピドゥ・センターの彼女たち』展、差異の招喚」、鈴木杜幾子訳、明治学院大学、『藝術学研究』第二〇号、二〇一〇年六月) がおこなわれるなど、ジェンダーによる不均衡克服の真摯な試みも少なくない。

こうした現況にもかかわらず、日本の西洋美術史研究者が、自分の専門領域におけるジェンダー論あるいはフェミニズムの立場からの欧米の研究を積極的に紹介し、また自分の研究にそうした視点を取り入れることが少なく、またそのような場がほとんどないのはまことに残念なことである。こうした研究が他の「全般的視野に立った」研究に対して何か特殊なテーマであるかのように扱われているためと思われるが、性差を含め、す

べての人間は「ジェンダー化」されているのだから、この問題を越える「普遍的」問題はあり得ない。

このような現状を打破するために今回のシンポジウムは企画された。西洋美術史上、女性の身体は、時にそれを(男性芸術家が)描くことが芸術そのもののメタファーとされるほど主流の表象であった。女性芸術家たちもまた、ある時には主流に抵抗し、ある時にはそれに添って作品を創造してきた。誰が創ったどのような作品であっても、それは視るといふことの制度(社会の眼差しのありようから、美術教育・展示・市場・顕彰等の文字通りの制度まで)に規制されているし、事実上そこから生まれると言っても過言ではない。ジェンダー論あるいはフェミニズムに対する関心を共有する発表者の方々に、このような視点からそれぞれの時代・分野の研究の現況と問題点を語っていただくことによつて、専門家にとつても西洋美術に関心のある一般の人々にとつても残念な欠落が埋められることを切に願うものである。

シンポジウム「西洋美術とジェンダー——視ることの制度」

場所：明治学院大学白金キャンパス

日時：2011年12月10日(土) 10時～18時

主催：明治学院大学芸術学科・言語文化研究所

共催：イメージ&ジェンダー研究会／後援：日仏美術学会

総合司会：鈴木杜幾子

午前の部司会・コメンテーター：馬淵明子

午後の部司会・コメンテーター：天野知香

午前の部

10：00 開会の辞 鈴木杜幾子

10：10 新保淳乃

10：50 米村典子

11：30 吉田典子

12：10 午前の部コメント 馬淵明子

12：25 午前の部終了

午後の部

13：30 味岡京子

14：10 香川檀

14：50 中嶋泉

15：30 午後の部コメント 天野知香

15：45 休憩

16：00 全体討議 司会 鈴木杜幾子